



「この人間というやつは、いつも飛んだり跳ねたりしてはいるが、たちまち草の中にもぐって昔ながらの歌をうたう肢の長い蝗虫のように思われてならない。草の中でおとなしくしていきりやまだしもだが、溝さえ見つかりや、鼻を突っ込みやがる」

（『ファウスト』「天上の序曲」、高橋義孝訳）

本稿を執筆している2022年3月下旬、コロナ禍が続くなかに勃発したウクライナ危機が連日報道されている。パンデミックの遷延、国家間の紛争と国際秩序の動揺、地球温暖化と自然災害…。人類の存続にかかわる脅威が重苦しくわれわれの日常を覆っている。

厳しく重い現実にはつい目を背けたくなるが、われわれにとって避けては通れない数字のひとつに自殺の統計がある。コロナ禍において日本の自殺統計は考慮すべき推移を示している。中国・武漢市における最初の新型コロナウイルス感染症の発生が2019年12月、わが国第一例目の発生が2020年1月であるから、2020年と2021年の自殺統計（厚生労働省自殺対策推進室、警察庁生活安全局生活安全企画課）が、コロナ禍の影響を押し量る資料となる。

わが国の自殺者数は、1998年に3万人を超え、2003年には警察庁が統計を取り始めた1978年以降で最多の34,427人〔自殺死亡率（人口10万人当たりの自殺者数）27.0（男性40.0、女性14.5）〕に増加した（警察庁資料より、以下同）。その後3万数千人で推移した後、2010年以降は10年連続の減少となり、2019年には自殺者数20,169人〔自殺死亡率16.0（男性22.9、女性9.4）〕まで減少した。ただし、このように自殺者総数が減少傾向にあっても、わが国の自殺死亡率は先進7カ国（G7）中1位であり、とくに10歳代および20歳代で死因の第1位が自殺となっているのはG7では日本のみであることが指摘されていた。

コロナ禍の2020年には自殺者数21,081人（自殺死亡率16.7）となり、前年に比べ912人（4.5%）増加した。男性は実数で11年連続での減少（自殺死亡率22.9）であったのに対して、女性は2年ぶりの増加（自殺死亡率10.9）となった。年齢階級別では20歳代で対前年比3.0ポイント、10歳代で同1.1ポイント自殺死亡率が増加し、若年女性にコロナ禍の影響がより強く出現していることが明らかになった。月別自殺者数の推移をみると2020年6月までは過去5年平均と比べて自殺者は減少していたが、同年7月以降に増加して10月に例年にはないピークが出現した。同年3月2日の一斉休校、4月7日の緊急事態宣言発令に続いて、5月25日の緊急事態宣言全国解除、7月22日のGo Toトラベル開始、10月1日のGo Toイートの開始といったコロナ対策の推移を当てはめると、コロナ禍の始まりにおいて社会活動が停滞した時期には自殺者数はむしろ減少していたが社会活動が再活性化する時期に一致して自殺者数は増加した。また、著名な男女俳優の自殺報道に関連するウェルテル効果も推定された。

つい先ごろ確定値が公表されたばかりの2021年統計では、自殺者数は21,007人となり、対前年比は実数ではかろうじて74人（0.4%）の減少を認めたが自殺死亡率は16.8と0.1ポイント増加した。男女別にみると、男性は実数で12年連続の減少（自殺死亡率22.9）であったのに対して、女性は2年連続の増加（対前年比42人増加）（自殺死亡率11.0）となった。年齢階級別では20歳代で対前年比0.9ポイント、50歳代で同0.8ポイント自殺死亡率が増加した。

プレコロナ期から指摘されていたわが国の自殺死亡率の高さ、とくに若年層の脆弱性は、長引くコロナ禍でさらに強調されている。

布村明彦